

【講演記録/明治、大正、昭和に上海にあった日本の大学「東亜同文書院」高松講演・展示会】

東亜同文書院と上海 —愛知大学前史—

愛知大学非常勤講師、愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 石田 卓生
(2019年10月13日、サンポートホール高松)

はじめに

はじめさせていただきます。よろしくお願ひします。私は愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員の石田卓生と申します。本日は「東亜同文書院と上海—愛知大学前史—」と題して報告します。

お集まりの方のほとんどは愛知大学の卒業生でいらっしゃるようですが、東亜同文書院と愛知大学との関係についてはあまりよくは知らないという方がほとんどなのではないでしょうか。私も愛知大学の出身なのですが、学部生の頃はよくわかってはいませんでした。また、先輩方にお話しをおうかがいすることもあるのですが、在学中に母校と東亜同文書院のつながりについて聞いたことなどなかった、と聞くことが多いです。今日は、そうした関係者の間であってもまだまだ広く知られているわけではない東亜同文書院と愛知大学とのつながりについて話を進めていこうと思います。

東亜同文書院という学校は中国の上海にあったのですが、日本の学校なのになぜ上海にあったのでしょうか、また、それがどうして今の愛知大学へとつながっているといえるのでしょうか。

私は、昨年からは愛知大学で「愛知大学の歴史」についての授業を担当しています。毎年400名ほどの学生が受講しているのですが、ほとんどの学生は、東亜同文書院はもちろん愛知大学の成り立ちについてまったく知りません。授業を受けて初めて自分たちが学ぶ学校が、どのようにできたのか、一体どんなと

ころなのか、ということがわかるようになるのです。今日は、そうした大学史の授業での経験を踏まえて、卒業された先輩方へ向けて愛知大学の成り立ちをなるべく具体的に紹介していこうと思います。

I 本間喜一先生と愛知大学

先輩方のなかには実際にお会いしたことがある方もお見えになるかもしれませんが、愛知大学を創立された方は本間喜一先生です(図1)。写真の背広姿の方が本間先生です。この本間先生は、もともと上海にあった東亜同文書院大学の学長でいらっしゃったのですが、1946年に東亜同文書院大学の教職員、関係者とともに愛知大学を設立しました。愛知大学と東亜同文書院は組織的には無関係であると説明する向きもありますが、実際のところ東亜同文書院大学と本間先生あってこそのものであり、東亜同文書院と本間先生と無関係では絶対に成立することはなかった学校です。

本間先生に創立された愛知大学の教育活動をわかりやすくいえば、「ローカル」「グロー



図1 愛知大学の整備を指揮する本間喜一(向かって左)(愛知大学所蔵)

バル」「アジア」を重視していこうというものです。敗戦を経て民主化された平和国家としての日本を築くためには、この三つを重視した教育が必要だと考えたのです。

「ローカル」というのは、戦前の中央集権、一極集中から地方へのシフトということです。政治経済はもちろん、教育についても戦前は大都市、なんといっても東京に集中していましたから、地方で高度な教育機会を創出するというのは実に画期的なことでした。愛知大学が設置された豊橋は県庁所在地ですらありませんから、そこに旧制大学を設立してしまふということは驚くべきことだったのです。また、先にも触れましたが愛知大学の豊橋での開学については地元の官民の熱心な支援があり、そうした地域への恩返しということもあつたと想像します。愛知大学には現在、地域政策学部という地方を重視しようという学部がありますが、実は学校自体にそうしたねらいがそなわっていたのです。

次に「グローバル」についてですが、これはあのような破滅的な戦争が行われてしまったことへの反省が大きいでしょう。それは国際性の欠如です。本間先生はヨーロッパに留学されたり、世界中の人々が集まっていた国際都市・上海で暮らしたりするなど国際経験が豊かでいらっしゃいましたから、いくら優秀であっても大都市の学校でガリガリ勉強するだけではいけない、平和な日本を実現するためには国際協調をなし得るような世界のことを広く知る人材が必要だと考えたのです。

三つ目が「アジア」です。これは二つ目のグローバルと一部重なるものですが、国際化といたり、現代的に言えばグローバルといたりしたところで、日本というはアジアのなかあるわけです。ですから、身の回りのアジアを飛び越してアメリカやヨーロッパだけを見ていても国際的になりようがない。だからこそ、アジアが重要となるのです。

この三本柱が愛知大学の教育の根幹なわけですが、興味深いのはここに昨今よく使われる「グローバル」というキーワードが見えてくるということです。「グローバル」とは、グローバルな視点に立ちつつ「ローカル」な状況に合う行動をしていこうというものです。本間先生の愛知大学は、「グローバル」な視点から「アジア」のなかの日本を捉えつつ、同時に日本を「ローカル」から築いていこうという、まさに「グローバル」な教育が掲げられていたのです。

II 東亜同文書院とは

もちろん、アジアを重視するという姿勢は、東亜同文書院大学との関係も大きく影響しています。東亜同文書院大学というのは、まさにアジアを重視する学校でした。これを運営したのは東亜同文会という団体なのですが、その会長は近衛篤磨という人物です。近衛文磨の父親といった方がわかりやすいかもしれません。あとはNHKの大河ドラマにもなった篤姫とも関係があります。篤姫は島津家の分家の生まれ、そこから本家の養女に入り、さらに近衛家の養女となって将軍家に嫁入していますから、篤磨公とは義理の姉弟ということになります。この近衛家というのは大化の改新の藤原鎌足にはじまって藤原道長に続き、さらに天皇家から養子をお迎えして、その血統を継ぐという名門中の名門です。その当主が篤磨公です。この彼が根津一という人物を院長に任命して上海に設立したのが東亜同文書院でした。

これは 1901 年に行われた東亜同文書院の第一回入学式の写真です(図 2)。最前列中央が篤磨公です。撮影されたのは、もともとは鹿鳴館として使われていた場所です。篤磨公の右が肥後熊本藩細川家出身の長岡護美、その右隣が東亜同文書院院長の根津一先生です。

東亜同文書院は、当時の中国、すなわち清国との貿易に関する教育や研究を行いました。はじめは貿易実務を教える私塾でしたが、次第に教育内容や中国研究のレベルを上げていき、後に旧制専門学校、さらに旧制大学となっています。今でいえば商学や経営学を専門とする大学ですが、最大の特徴は中国に関わることを専門的に扱う点にありました。学生は、一学年が多くて100名程度で、彼らのほとんどは各府県が学費を支給する府県派遣生でした。1901年から敗戦までに5000名ほどの卒業生を輩出し、彼らが中国に関わるあらゆる分野の現場で活躍したこともあって、この学校は戦前では名門校として有名でした。しかし、日本敗戦後に日本人が帰国しなければならなくなると、上海にあった東亜同文書院は活動することができなくなり、消滅してしまっただけです。

III 東亜同文書院成立の背景

では、なぜ日本の学校である東亜同文書院が上海にあったのでしょうか。次に東亜同文

書院の開校をめぐるさまざまな状況を見ていきましょう。

1. 人口

これは21世紀現在の各地域・国の人口の割合を示したものです(図3)。人口というのは、総人口中の労働人口が増えて経済成長を促すことを「人口ボーナス」というように、国の勢力を示す一つの指標となるものです。現在、世界のなかで日本人は2%を占めています。中国人は20%ほど、西ヨーロッパ地域の人々は5%ほど、アメリカ人は5%ほどを占めています。日本は国土が狭い割には多いといえるでしょうが、やはり中国は圧倒的です。

明治時代の初期の状況を見てみましょう(図4)。日本人は3%程度ですが、これは当時のアメリカと変わらない数字です。人口だけで考えれば、日本とアメリカは同じぐらいの規模でした。さて、中国、当時は清国でしたが、現代と同じく圧倒的に多いです。



図2 1901年東亜同文書院第1期生入学式(東亜同文書院大学記念センター所蔵根津家文書)

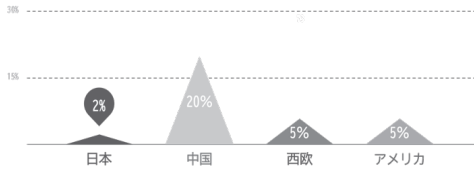


図 3 2009 年世界人口に占める各国・各地域の割合

(Angus Maddison, Historical Statistics of the World Economy: 1-2008 AD, <http://www.ggdc.net/maddison/oriindex.htm>) に基づいて報告者作成)

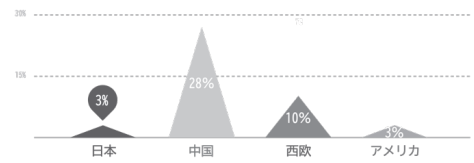


図 4 1870 年世界人口における各国・各地域の割合

(Angus Maddison, Historical Statistics of the World Economy: 1-2008 AD, <http://www.ggdc.net/maddison/oriindex.htm>) に基づいて報告者作成)

通時的に見ると、日本人というのは明治時代の 3%から漸減しつつあるのに対して中国人は常に 20~30%を占めているわけですから、いかに巨大な存在であり続けているのかということがわかります。

2. 経済

次に国内総生産 (GDP) から見ていきましょう。これは最近の世界各国の GDP を合計し、そのなかである地域やある国がどれくらいの割合を占めているかを示したものです (図 5)。

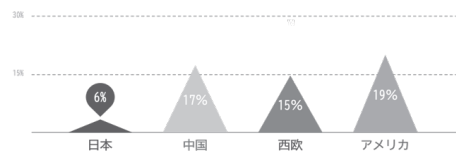
現在、中国はアメリカに匹敵する状況になっています。日本は 6%にすぎないですが、先ほど見た人口を踏まえて一人当たりで考えるとなかなか豊かということになります。

日本のバブル経済の頃を見てみると (図 6)、日本は単独で 10%近くを占めていますから、

たしかにものすごい経済大国であったことがわかります。

明治時代はどうだったでしょうか (図 7)。この頃はいわゆる帝国主義の時代です。広大な植民地を支配して隆盛を誇る西ヨーロッパ諸国が 30%近くを占めています。日本はどうかというとは、わずか 2%ほどにすぎません。それに対して、清国は単独で 17%を占めていました。19 世紀中盤以降の中国は、アヘン戦争や日清戦争など劣勢のイメージが強いと思いますが、実際の中国は日本とは比べものにならないくらいに経済力があつたのです。明治時代の日本というのは、近代化を進めていこうという時期でしたから、もちろん近代化をリードした欧米諸国との関係が必要になりますが、地理的に近い場所にこれだけ豊かな国があつたのですから、当然、この地域を重視しようという考えがでてくるわけです。それが中国を専門とする東亜同文書院として結実したといえるでしょう。

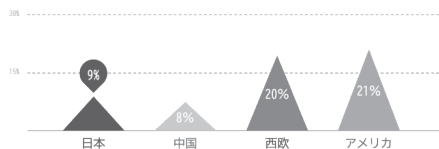
少し話はそれますが、GDP の変遷を明治から現在まで通して見てみると、中国は 20 世紀に日本を下回るまで国力を落としましたが、現在は 19 世紀の水準まで国力を回復させています。つまり、東亜同文書院が作られた時代背景と現在は極めて近い状態になっているともいえます。ですから、現在の私たちにとって東亜同文書院をめぐる動きというのは



- ・ 1人当たりのGDP (インターナショナル・ドル)
- ・ 日本—22,816 中国—6,725
- ・ 西欧—22,246 アメリカ—31,178

図 5 2009 年世界の国内総生産合計に占める各国・各地域の割合

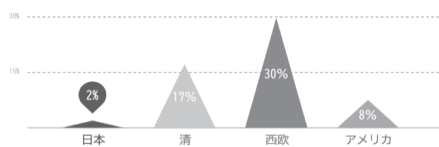
(Angus Maddison, Historical Statistics of the World Economy: 1-2008 AD, <http://www.ggdc.net/maddison/oriindex.htm>) に基づいて報告者作成)



- ・ 1人当たりのGDP (インターナショナル・ドル)
- ・ 日本-19,355 中国-1,967
- ・ 西欧-16,995 アメリカ-22,849

図 6 1991 年世界の国内総生産の合計に占める各国・各地域の割合

(Angus Maddison, Historical Statistics of the World Economy: 1-2008 AD, <http://www.ggdc.net/maddison/oriindex.htm>) に基づいて報告者作成)



- ・ 1人当たりのGDP (インターナショナル・ドル)
- ・ 日本- 737 清-530
- ・ 西欧-2,080 アメリカ-2,445

図 7 1870 年世界の国内総生産の合計に占める各国・各地域の割合

(Angus Maddison, Historical Statistics of the World Economy: 1-2008 AD, <http://www.ggdc.net/maddison/oriindex.htm>) に基づいて報告者作成)

現代的な意味を持つものであり、今後ますます注目されるのではないかと思います。

話を戻しましょう。

中国の人口、経済力が巨大であったとしても、見てきたように西洋というのもやはり強力であり続けていますから、中国をやたらと重視するというのは、やや合理性に欠けるように見るかもしれません。そこで、次は明治時代後半の日本の貿易状況を見てみたいと思います(図 8)。近代化を目指すなかで貿易額は伸びていっているのですが、それにしがたって貿易赤字が常態化していています。これでは貿易立国ということにはなりません。

次に同じ時期の中国大陸との貿易のみにしぼった状況を見てみましょう(図 9)。日本の

全貿易額のおよそ 2 割が中国とのもので、やはり次第に貿易額は伸びています。ここで注目すべきは貿易黒字になっているということです。貿易全体は赤字傾向であるにもかかわらず、中国大陸との貿易は黒字傾向を見せているのですから、当時の日本にとってこれが重要であったことがわかります。このような状況のなかで東亜同文書院が中国に関わる経済活動の専門家を養成しようとしたことは理にかなったものだったのあり、そこには必然性があったということがわかります。

3. 空間

さらに中国はとても近い。今、飛行機の乗ると日本からイギリスは 13 時間程度、アメリカ東海岸は 12 時間程度、上海までは 4 時間程度かかります。それでも欧米は遠いように思えますが、長距離移動が船か鉄道だった戦前はさらにとっても大きな差がありました。イギリスへ向かう場合、船ならスエズ運河経由で 50 日程度、アメリカ経由では 1 カ月程度かかり、シベリア鉄道でヨーロッパ向かうとパリまで 2 週間程度かかりました。それに対して、上海までは船でわずか 2~3 日だけだったのです。

4. 清国国内

中国を重視するという背景があったならば、東亜同文書院は、清の首都である北京ではなく、なぜ上海に開校したのでしょいか。それは、一つには、上海が国際的な経済活動が行われている都市だったということがあります。上海は外洋と接続されると同時に水運によって内陸とも結ばれている港湾都市でしたし、租界を拠点としてイギリスやフランスの商人によって国際貿易が盛んに行われていました。それに対して北京は政治の中心ではあるものの、港湾のない内陸の都市であり、国際貿易の現場ではありませんでした。また、1895 年の下関条約で日本は杭州や蘇州、沙市、重慶

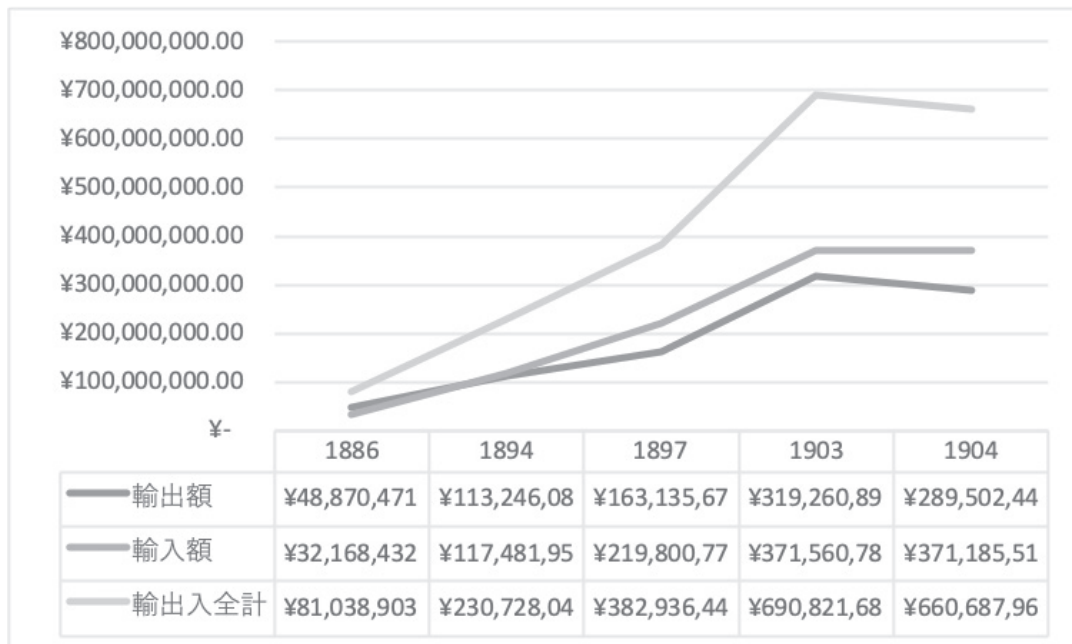


図 8 明治時代後半の日本の貿易額 (『大日本外国貿易年表』大蔵省により報告者作成)

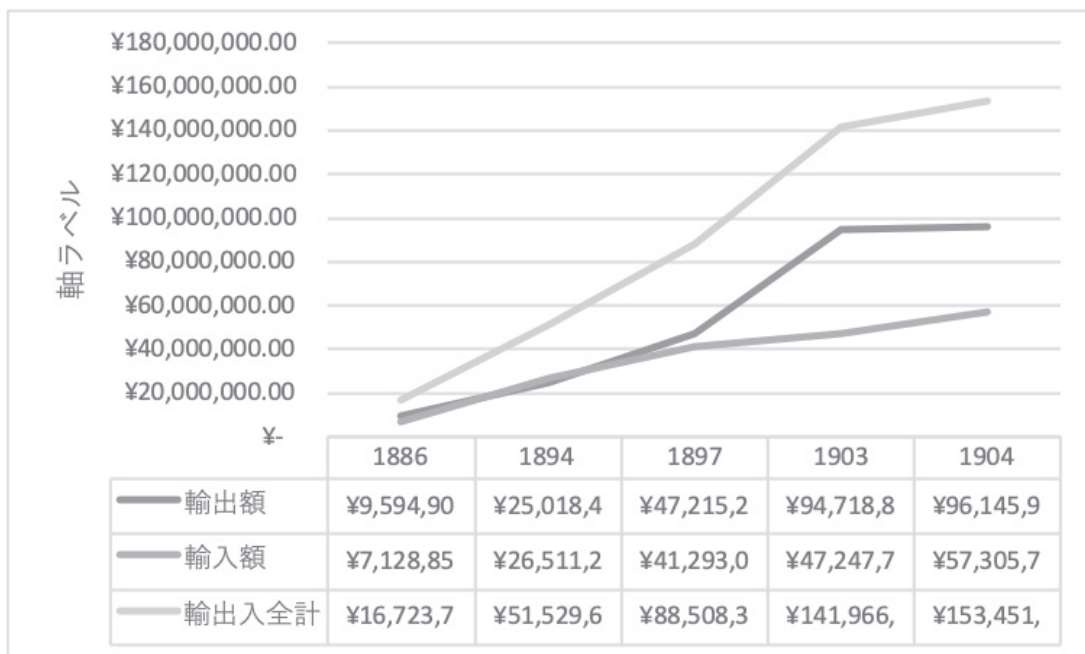


図 9 明治時代後半の日本の対中国大陸貿易額 (1886 年分は「支那」部分、1894 年以降は「支那」部分と「香港」部分の合計額) (『大日本外国貿易年表』大蔵省より報告者作成)

を開港させており、上海を起点とする長江流域での商業活動の発展が望める状況でもありました。さらに、この地方の実力者・劉坤一と張之洞の賛同を得ていたということも上海での開校に影響していたと考えられます。

IV 東亜同文書院があった時期の上海のイメージ

上海の東亜同文書院についてもう少し詳しく見ていきましょう。

まず、当時の上海について具体的にイメージしていただくために、ここ高松と比較しつつ見ていこうと思います。

東亜同文書院があった時期、例えば1928年頃の高松の人口は8万人くらいでした。それに対して、上海は1930年代で370万人程、北京、当時は北平といっていました、これが150万人程度、香港も北京と同じくらいでした。東京は1929年で530万人程です。ちなみに同じ頃のニューヨークやロンドンが700万人ほどでした。人口に比例して市街地は広いものとなりますから、高松と比べて当時の上海などの大都市の市街地はかなり広大なものとなっていました。さて、このように見えてくると、東亜同文書院に合格した香川県出身者が入学式のために上京したり、上海へ渡ったりした時の驚きが想像できそうです。

こうした大きさについての具体的なイメージというのは、実感しにくいものです。例えば、日本人は中国のことを大きいとは思っているけれど、果たしてそれが一体どれくらいなのかということとは案外わかっていないことが多いのではないのでしょうか。これは日本と中国を重ねたものです(図10)。稚内に北京を重ねても五島列島が香港に届きません。東亜同文書院生も大陸に渡って、その大きさを実感したに違いありません。



図10 日本と中国の大きさの比較 (The True Size Of ... <http://thetruesize.com/>)

V 東亜同文書院と東京同文書院

これは1901年5月26日の開校式の様子を撮影した写真です(図11)。向かって左手



図11 1901年上海での東亜同文書院開学式(東亜同文書院大学記念センター所蔵)

の壇上でスピーチをしているのが根津一と思われまふ。その近くの大礼服姿が長岡護美でしょう。右手には制服姿の第1期生が並び、奥の天幕の人々は服装から清国の人々のようです。写真では特定できませんが、記録によればここには清の有力者・盛宣懐も出席していました。盛宣懐をはじめとする多くの清国人が出席していることからわかるように、東亜同文書院は日本と清国の協調のものにはじめられたものでした。いわば日清共同教育プロジェクトといえるでしょう。

このことを補強するのが、東京同文書院の存在です(図12)。これは東亜同文書院の兄弟校というべきものです。東亜同文書院は日本人が中国に渡って学ぶ学校であるのに対し、東京同文書院は中国人が日本にやって来て学ぶ学校でした。このように日本人が一方的に



図12 東京同文書院(東亜同文書院大学記念センター所蔵)

中国に押しかけたのではなく、両国がそれぞれ相手国の若者を受け入れていたのです。

VI 東亜同文書院の教育

これは東亜同文書院生・教職員の記念写真を拡大したものです(図13)。前から2列目中央が根津一です。隣には白人女性があり、その隣の二人は服装から清国人と思われます。彼らは院長の根津と同列で椅子に着座していることから教員と考えられます。東亜同文書院はもちろん中国語学習に力を入れていましたが、こうしたネイティブから直接教わっていました。さらに中国語だけではなく、英語にも力が入れられていました。写真の女性はおそらく英語教師だと思われます。中国を主要なターゲットにするとしても卒業生が活動するのは国際貿易の現場となるわけですから、国際的な言語である英語は重要だったのです。



図13 東亜同文書院教職員・学生(1902年?)(東亜同文書院大学記念センター所蔵)

国際貿易の現場での活動に耐えうる語学力を身につけ、さらに簿記などの実務的な授業や中国についての専門的な授業が課せられた学生の生活はさぞ大変なものだったと想像できます。

VII 東亜同文書院の学生生活

しかし、だからといって東亜同文書院生はガリ勉というわけではありませんでした。卒業生のお話をお伺いすると、学生は複数の部活に所属して毎日さまざまな運動をして体を鍛えていたそうです。1964年の東京オリンピ

ックで柔道金メダルを取ったアントン・ヘーシンクを指導した道上伯が1940年代に東亜同文書院で柔道を教えているくらいですから、この学校の部活は同好会レベルではなく相当本格的だったようです。

この写真は相撲部です(図14)。キャンパスに土俵があったわけです。ほかにもラグビーもありました(図15)。ちょうどラグビーのワールドカップが開催されていますが、あれを見てもわかるようにラグビーというのはしっかり鍛えていないとプレイできないものです。野球もありました(図16)。こ



図14 東亜同文書院赫司克而路校舍時代の相撲部(東亜同文書院大学記念センター所蔵)



図15 東亜同文書院虹橋路校舍時代のラグビー部(東亜同文書院大学記念センター所蔵)



図16 東亜同文書院虹橋路校舍時代の野球部(東亜同文書院大学記念センター所蔵)

の野球部の部員の胸に「TUNG WEN」とありますが、これは「同文」の中国語発音をアルファベットで表記したものです。彼らは学内で練習するだけでなく、中国の学生や上海のアメリカ人なども試合をしましたから、学生生活自体が国際的だったわけです。

東亜同文書院の学生というのは真に文武両道だったわけです。

もちろん学生がリラックスする一時もありました。これはお風呂の写真です（図 17）。当時の中国は日本のように頻繁に湯船に浸かる習慣がありませんでした。しかし、日本人はそれではダメなのですね。やはり湯船がないと疲れを取ることができない。

勉強をして運動をし、汗をお風呂で流したら寝るのですが、これが寝室の様子です（図 18）。花札に興じる者もいれば、真ん中の学生は何か読み物をして、手前の学生はすでに寝入っているようです。



図 17 東亜同文書院虹橋路校舍時代の浴場（東亜同文書院大学記念センター所蔵）



図 18 東亜同文書院虹橋路校舍時代の学生寮寝室（東亜同文書院大学記念センター所蔵）

今、見ていただいた写真が普通の学生生活です。大都会の上海にあるといっても、あまり都会らしい雰囲気が感じられません。それもそのはずで、東亜同文書院は路面電車で都心まで1時間以上かかる西南の郊外にありましたから、日常は中国の片田舎で生活しているようなものでした。有名な芥川龍之介は東亜同文書院卒業生の新聞記者の案内で東亜同文書院を見学したことがあるのですが、周辺には畑が広がっており日本にいるのではないかと錯覚したと述べていますから、とても牧歌的な環境だったようです。

そうはいつでも授業のない週末は繁華街へ出掛けることもありました。都心にある映画館やカフェなどで遊ぶこともあったのです。有名な内山書店にも学生は出入りしており、卒業生のなかにはここに就職した者もいました。この内山書店は教員も利用しており、ここで魯迅と出くわした教員が魯迅に頼んで東亜同文書院で講演をしてもらったことがあります。

Ⅷ 東亜同文書院の学風とそこで学んだ香川県出身者

見てきたように東亜同文書院生は、肌身で中国を感じつつ、アグレッシブな学生生活を送っていました。では、それを実現させた東亜同文書院の教育とはどのようなものだったのでしょうか。ここで私がいいたいのは、カリキュラムではなく学風とでもいうようなもっと根幹のことです。

東亜同文書院の卒業生は、母校の学風を「書院精神」あるいは「根津精神」という言葉で表していました。この「根津」とは東亜同文書院創立を指揮し、20年余りの長きにわたって院長を務めた根津一のことです。彼の名前を冠する学風とはどのようなものだったのでしょうか。その雰囲気を伝えるのが、1919年の入学式での根津のスピーチです。

同文書院は単に学問を教えるだけの学校ではない。学問を専門にやりたい者は大学にゆくべきだ。大学は学問の蘊奥を究めるところであるから、そこで学ぶのが正しい。諸子の中に学問で世に立ちたい者があれば、よろしく高等学校から大学に進むべきで、本日この席において退学を許す。志を中国にもち、根津に従って一個の人間たらんと欲する者は、この根津とともに上海にゆこう。¹

新入生は熾烈な受験を突破し難関の東亜同文書院に入ったエリート予備軍です。そんな彼らに根津は、社会的成功を目指すことを第一義とするのではなく、道徳的に正しい人間として中国と関わって生きていこう、と呼びかけたのです。興味深いのは、「ともに上海にゆこう」と学生と同じ目線に立っていることです。上からの指導ではなく、学生の自主性を重んじているといえるでしょう。これを聞いた新入生は驚くと同時に根津に魅入られるわけです。そして学期が始まると、根津が自ら道徳の授業を担当しました。東亜同文書院の教育が最も重視していたのは善悪是非を正しく判断する道徳心だったのです。これが東亜同文書院の学風の根底にあったのです。

こうした東亜同文書院で学んだ学生にはもちろんこの香川県出身の方もいらっしゃいます。現在確認できているところでは 52 名です。例えば、石田武夫さんは中国語の研究者として滋賀大学教授を務められました。山名正孝さんは中国経済を研究して神戸商科大学教授を務められていました。ほかにも田中香苗さんは東亜同文書院を卒業すると毎日新聞に入り、戦後は社長を務められました。

おわりに——東亜同文書院から愛知大学へ

こうした東亜同文書院は、日本の敗戦によ

って閉校を余儀なくされたのですが、最後に、これがどのように愛知大学へとつながっていったのかを見ていきましょう。

当たり前のことですが、学校がなくなって一番困るのは学生です。戦時下の学生は難関試験を通過して東亜同文書院に入学したにもかかわらず、兵隊に取られたり、工場へ労働に行かせられたりして勉強をさせてもらえず、戦争が終わってようやく勉強ができるかと思ったら学校そのものがなくなってしまったのです。もちろん、それは学歴、就職にも関わるものです。また、こうした問題は東亜同文書院大学の学生だけではなく、外地にあった日系の高等教育機関の現役学生にも共通するものでした。そうした学生のために東亜同文書院大学の最後の学長だった本間喜一先生が作ったのが愛知大学だったのです。

東亜同文書院大学の学長であったのならば、その学生の面倒を見るのは当たり前であると思うかもしれませんが、よくよく事情を見ていくと本間先生がそこまでおやりになったというのは普通のことでありません。

本間先生は東大を出て裁判官や東京商大、現在の一橋大学の教授を務められたり、弁護士をしておられたりした法律家で、東亜同文書院大学には 1940 年に赴任し、1944 年に学長となっているのですが、経歴からわかるように、もともと中国はもちろん東亜同文書院とも全く関係のない方でした。そもそも東亜同文書院の全責任を負うのは学校を運営する東亜同文会のはずです。しかし、敗戦時、本間先生が学長として上海で戦地から戻ってくる学生のケアや学校の存続を模索している時期、東亜同文会の会長・近衛文麿は 1945 年 12 月に自殺し、幹部は公職追放され、さらに 1946 年 1 月には残された事務方が東亜同文会の解散を決議してしまいます。1946 年 3 月、本間先生が帰国した時、自分を学長として雇

¹ 石川順『砂漠に咲く花』私家版、1960 年、78-79 頁。

っていた東亜同文会自体がすでに機能していなかったのです。ですから、本間先生の愛知大学設立というのは後ろ盾がまったくないものでした。先生も含めたわずか 13 名の東亜同文書院大学の教職員、関係者によって始められたのです。

こうして愛知大学が作られたのですが、創立者である本間先生の教育観とはどのようなものだったのかを最後に紹介したいと思います。

僕は人なんか教えられるもんじゃないと思っているんだ。自分がわからんことを、人に話して、考えてくれとは言えるけどね。疑問があれば、それが知識の初めなんだ..... [学問を投げ出す学生は] 疑問なんか持っていない、そこに躓きがある。万物を疑うことから学問は進歩するんだ。疑問は知識の母だよ。疑問を抱かせるということが教育の中心だと思う²

この本間先生の教育姿勢と、先ほど紹介した根津先生の「人間たらん」という教育姿勢は、ともに学生個々の自主的な学びを志向するものです。これらを根底に「ローカル」「グローバル」「アジア」を重視した教育活動を進めようとするのが、現在の愛知大学ということになります。

冒頭でも言いましたが、今日、述べてきたような東亜同文書院から愛知大学という流れ、継続性というのは長らくあまり触れられてきませんでした。そのことを、現在の愛知大学は、今回のようなイベントを通して学内外に紹介することによって改めて確認しつつ、先人の活動を受け継ごうとしているのです。

以上で私の発表は終わりです。どうもありがとうございました。

なお、〔 〕は引用者による。

本稿は JSPS 科研費基盤研究 (C) 18K00800 助成による研究成果の一部である。

² 加藤勝美『愛知大悪を創った男たち』愛知大学、2011年、470頁。